

発達の観点からみた 女性の親との心理的距離と性格特性の関係

三 田 英 二

**Relation between psychological distance
and Personality trait with women's parents**

MITA Eiji

要約

本研究は、女性を調査対象として、親との心理的な距離と性格特性との関係を発達の観点から検討するものであった。

青年期後期群 90 名 (平均年齢 19.18 歳, SD=.76, range18-21), 成人期前期群 80 名 (平均年齢 25.98 歳, SD=2.09, range22-30) を調査対象者とした。

性格特性を測定する用具として、市販されている矢田部ギルフォード性格検査 (YG 検査) を用いた。

親との心理的な距離を測定する用具として、加藤・高木 (1980) が作成した独立意識尺度を三田 (2003) が因子分析した結果のうち、第 2 因子「親への依存」因子と第 5 因子「親への服従」因子の項目を用いた。青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、「高依存・高服従群」、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」、「低依存・低服従群」の 4 群に分け、各群の YG 検査下位因子得点について比較検討を行った。

この結果、青年期後期段階まで、親との心理的な距離に関係なく、内的準拠性は各群類似したものになっているが、青年期後期段階での親との心理的な距離の違いによって、成人期前期段階での内的準拠性に大きな差異が生じてくること、そして、成人期への移行期に (移行後に)、内的準拠性を変化させるか否かの軸が、親に対する心理的な依存心の高・低にある、ということが明らかになった。

．問題

本研究は、「複雑」だと指摘される女性の自己形成（詳しくは、三田（2003）を参照していただきたい）を検討する一環として行われている。

前研究（三田、2008b）では、親との心理的な距離によって、青年期後期群・成人期前期群をそれぞれ4群に分け（群分けについての詳細は後述する）、Self-Esteem（以下、SEと略記）の観点から検討した。その結果、青年期後期段階では、4群ともSE得点は差異がみられなかったが、成人期前期段階になると、親からの心理的な距離が最も離れている群が、他の群よりも、有意に高いSE得点を示し、青年期後期段階での同一の群（親からの心理的な距離が最も離れている群）と比べても、成人期前期群のSE得点は、有意に上昇していた。

親との心理的な距離が最も離れている群が、青年期後期段階から成人期前期段階にかけて、SEを急速に高めていくという結果が得られた。

加藤（1987）は、青年期を3段階に分け、青年前期（11～16歳頃まで）を「自己の変化と動揺」の時期、青年中期（20、21歳頃まで）を「自己の再構成」の時期、青年後期（25、26歳頃まで）を「自己と社会の統合」の時期とした（ただし、この年齢区分は、「男子の発達を中心とした場合であり、女子は、男子よりも1、2歳早く青年期に入り、1、2歳早く青年期が終わるものとみられる。」（p.19）ことを指摘している。本研究では、青年期後期とした調査対象の平均年齢は、後述するように19.18歳であり、成人期前期の調査対象の平均年齢は、25.98歳というように、加藤（1987）が指摘する年齢と発達段階とが、本研究で、青年期後期群としている年齢と発達段階と、若干、差異があるが、本研究では、一般的に用いられる年齢と発達段階を用いていることをお断りしておきたい。).

青年期から成人期への移行は、従来から心理的な意味だけでなく、いろいろな側面で親から自立していく時期だとされている。前研究（三田、2008b）では、親からの心理的な距離が最も離れていると考えられる群だけがSEを向上させたことが確認されている。本研究では、「自己の再構成」をした結果、「自己と社会との統合」をしていくために、どのような変化がみられるか（あるいは、変化がみられないのか）、より具体的な変数を用いて明らかにしていきたいと考えている。

性格は「一般に人の行動の背後にあって、特徴的な行動の仕方、考え方を生み出し続けている態度の総体」（教育心理学新辞典第8版、金子書房、1978、p.526.）と定義され、個人の行動を決める内的準拠枠として機能する。

本研究では、より具体的な変数として内的準拠枠としての性格を取り上げる。自己と社会との統合をしていく中で、親からの心理的な距離の違いによって、内的準拠枠としての性格がどのように変化していくか（あるいは、変化しないか）を検討することが本研究の目的である。

なお、本研究では、「内的準拠枠」と「性格（性格特性）」は、同義として用いる。

．方法

1．調査対象者

本研究は、継続的に行っているものである。分析対象のデータは、この一連の分析を始

めた当初（三田，2003）のものである。参考までに調査対象者について記しておく。

青年期後期段階の女性の調査対象者（以下，青年期後期群）90名（平均年齢 19.18 歳，SD=.76，range18-21）。成人期前期段階の女性の調査対象者（以下，成人期前期群）80名（平均年齢 25.98 歳，SD=2.09，range22-30）とした。なお、欠損値があるデータは今回の分析から除外しているため、下記（Table 1）に示す各群の人数と一致はしていない。

青年期後期群は，授業中に調査用紙を配布・回収し，成人期前期群は，郵送により配布・回収した（回収率 60 %）。

2．調査用具

（1）親との心理的な距離の測定およびグループ分け

親との心理的な距離の測定についても、前研究（三田、2008b）と同一であるが、参考までに記載する。

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」（項目 4，5，6，7，8，9，10，35，36），第2因子「親への依存」（項目 20，21，22，23，24，25，27，33），第3因子「時間的展望の拡散」（項目 3，13，14），第4因子「反抗期心理」（項目 28，30，31，37），第5因子「自信の欠如による親への服従（以下「親への服従」と略記）」（項目 17，18，26，29，34）の5因子が抽出されている（付録参照）。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件法により回答を求め、「全く自分にあてはまる」を5点とし，順次「全く自分にあてはまらない」まで4，3，2，1点として処理を行った。

なお，親に関係する項目への回答にあたっては，特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず，回答者の判断に任せた。青年期後期群での調査において，調査対象者からはこの点に関する質問は全くなかった（成人期前期群では郵送による調査のためこの点に関しては不明である）。

親との心理的な距離を測定する項目として，このうち，第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。「親への依存」因子得点の理論上の range は8点から40点となる。「親への服従」因子得点の理論上の range は5点から25点となる。中央値は「親への依存」因子で，青年期後期群24点，成人期前期群25点，「親への服従」因子で，青年期後期群12点，成人期前期群11点となった。

青年期後期群・成人期前期群別々に，それぞれの因子得点の中央値をもとに，「高依存群・低依存群」，「高服従群・低服従群」に分け，分析用にさらにそれをクロスさせ，「高依存・高服従群」，「高依存・低服従群」，「低依存・高服従群」，「低依存・低服従群」の4群に分けた。その内訳を Table 1 に示す。

Table 1 各群の人数

青年期後期群	n	成人期前期群	n
高依存・高服従群	20	高依存・高服従群	24
高依存・低服従群	18	高依存・低服従群	15
低依存・高服従群	18	低依存・高服従群	9
低依存・低服従群	27	低依存・低服従群	29
合計	83	合計	77

(2) 性格特性の測定

市販されている矢田部ギルフォード性格検査(以下、YG検査)を用いた。YG検査は、12の性格特性(下位因子、詳細は、Table 2 また 3 を参照されたい)を測定するよう作成されている。下位因子得点の理論上の range は、0点～20点である。得点が高い方が、その性格特性が強いことになるが、下位因子得点とは別に、YG検査プロフィール上に1～5までの標準点が設定されており、標準点3が、その性格特性の中庸を示し、標準点5は、その性格特性が非常に強いこと、標準点1は、その性格特性が非常に弱いことを示す。

なお、性格特性(下位因子)の解釈に当たっては、辻岡(2000)を参照している。

・結果

「親への依存」因子と「親への服従」因子の青年期後期群と成人期前期群の得点の比較は行われており、両因子とも得点上差異はないことが示されている(三田, 2003)。

「高依存・高服従群」、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」、「低依存・低服従群」の4群について、YG検査で測定される12下位因子の平均値を青年期後期群・成人期前期群別にそれぞれ求め、青年期後期群・成人期前期群別々に多重比較(分散分析)を行った。その結果、青年期後期群では、N(神経質)因子だけに有意差がみられた。成人期前期群では、I(劣等感)因子、N(神経質)因子、Co(協調的-非協調的)因子、A(服従的-支配的)因子、S(社会的内向-外向)因子の5つの下位因子に有意差がみられた。

青年期後期群の分散分析結果をTable 2に示す。

Table 2 青年期後期群の分散分析結果

YG検査	F	df	p
D(抑うつ性)	1.02	3, 79	n.s.
C(気分の変化)	2.53	3, 79	n.s.
I(劣等感)	1.71	3, 79	n.s.
N(神経質)	2.79	3, 79	**
O(客観的-主観的)	1.87	3, 79	n.s.
Co(協調的-非協調的)	.78	3, 79	n.s.
Ag(攻撃性)	1.21	3, 79	n.s.

G (活動性)	.67	3, 79	n.s.
R (のんき)	1.38	3, 79	n.s.
T (思考的内向 - 外向)	.88	3, 79	n.s.
A (服従的 - 支配的)	.23	3, 78	n.s.
S (社会的内向 - 外向)	.41	3, 78	n.s.

* * * * * p<.05

同様に，成人期前期群の分散分析結果を Table 3 に示す。

Table 3 成人期前期群の分散分析結果

YG 検査	F	df	p
D (抑うつ性)	1.66	3, 73	n.s.
C (気分の変化)	2.39	3, 73	n.s.
I (劣等感)	4.19	3, 73	* * *
N (神経質)	5.43	3, 73	* * * *
O (客観的 - 主観的)	1.70	3, 73	n.s.
Co (協調的 - 非協調的)	2.85	3, 73	* *
Ag (攻撃性)	.75	3, 73	n.s.
G (活動性)	1.44	3, 73	n.s.
R (のんき)	1.70	3, 73	n.s.
T (思考的内向 - 外向)	1.13	3, 73	n.s.
A (服従的 - 支配的)	3.83	3, 73	* *
S (社会的内向 - 外向)	3.46	3, 73	* *

* * * * * p<.05, * * * * * p<.01, * * * * * p<.005

分散分析の結果、有意差がみられた YG 検査下位因子について、青年期後期群、成人期前期群ごと、その後の検定（平均値の差の検定：t 検定）を行った。その結果を、Table 4 ~ 9 に示す。

Table 4 青年期後期・YG 検査 (N (神経質) 因子) (最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	20	12.20	4.54		* * *		* *
高依存・低服従群 (2)	18	7.83	5.22	* * *		+	
低依存・高服従群 (3)	18	10.78	4.86		+		
低依存・低服従群 (4)	27	8.81	5.88	* *			

+ * * * * p<.10 * * * * * p<.05 * * * * * p<.01 * * * * * p<.005

青年期後期群では、YG 検査 N (神経質) 因子 (Table 4) で、「高依存・高服従群」 > 「高依存・低服従群」 (1% 水準)、 「高依存・高服従群」 > 「低依存・低服従群」 (5% 水準)

の有意差が、「低依存・高服従群」 > 「高依存・低服従群」(10%水準)の有意傾向がみられ、高依存・高服従群や低依存・高服従群が、YG検査のN(神経質)因子の得点が高いことが示された。高依存・高服従群のN(神経質)因子得点平均値は1220で、この平均値はYG検査プロフィールでの標準点3に位置している。最も平均値が低かった高依存・低服従群でも標準点は3の位置である。推計学的には、高依存・高服従群が、高依存・低服従群と低依存・低服従群よりも、神経質傾向が強いことを示していることになるが、YG検査での判定上は、大きな差異はないものと考えられる。

Table 5 成人期前期・YG検査(I(劣等感)因子)(最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群(1)	24	10.17	5.49				****
高依存・低服従群(2)	15	9.13	3.27				**
低依存・高服従群(3)	9	8.67	5.79				
低依存・低服従群(4)	29	5.79	4.19	****	**		

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

成人期前期群のYG検査I(劣等感)因子(Table 5)では、「高依存・高服従群」 > 「低依存・低服従群」(0.5%水準)、「高依存・低服従群」 > 「低依存・低服従群」(5%水準)の有意差がみられ、低依存・低服従群のI(劣等感)因子の得点が、高依存・高服従群や高依存・低服従群の得点よりも有意に低い結果が得られた。低依存・低服従群以外の3群のI(劣等感)因子得点平均値は、標準点3に位置し、低依存・低服従群の平均値は、標準点2に位置している。このことは、低依存・低服従群が、高依存・高服従群と高依存・低服従群よりも、劣等感が小さいことを示している。

Table 6 成人期前期・YG検査(N(神経質)因子)(最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群(1)	24	11.17	4.54				****
高依存・低服従群(2)	15	9.93	4.04				**
低依存・高服従群(3)	9	9.44	6.09				+
低依存・低服従群(4)	29	6.21	4.55	****	**	+	

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

成人期前期群のYG検査N(神経質)因子(Table 6)では、「高依存・高服従群」 > 「低依存・低服従群」(0.5%水準)、「高依存・低服従群」 > 「低依存・低服従群」(5%水準)の有意差と、「低依存・高服従群」 > 「低依存・低服従群」の有意傾向がみられ、低依存・低服従群が他の群よりもN(神経質)因子得点が低い結果が得られた。標準点も、低依存・低服従群は2に位置し、他の3群は3に位置している。このことは、低依存・低服従群が、他の群よりも神経質傾向が低いことを示している。

Table 7 成人期前期・YG 検査 (Co (協調的 - 非協調的) 因子) (最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	24	7.50	2.65		**		***
高依存・低服従群 (2)	15	5.27	3.45	**			
低依存・高服従群 (3)	9	6.00	3.97				
低依存・低服従群 (4)	29	5.00	3.38	***			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

成人期前期群の YG 検査 Co (協調的 - 非協調的) 因子 (Table 7) では、「高依存・高服従群」 > 「高依存・低服従群」 (5%水準)、「高依存・高服従群」 > 「低依存・低服従群」 (1%水準) の有意差がみられた。標準点は、高依存・高服従群の平均値は 3 に位置し、高依存・低服従群と低依存・低服従群の平均値も 3 に位置している。YG 検査の判定上は、大きな差異はないものと考えられる。

Table 8 成人期前期・YG 検査 (A (服従的 - 支配的) 因子) (最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	24	9.58	4.09				+
高依存・低服従群 (2)	15	7.87	3.89				***
低依存・高服従群 (3)	9	7.56	5.32				**
低依存・低服従群 (4)	29	11.69	4.18	+	***	**	

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

成人期前期群の YG 検査 A (服従的 - 支配的) 因子 (Table 8) では、「高依存・低服従群」 < 「低依存・低服従群」 (1%水準)、「低依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」 (5%水準) の有意差がみられ、「高依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」 の有意傾向もみられた。低依存・低服従群以外の 3 群が示している平均値の標準点は 3 に位置し、低依存・低服従群の平均値が示す標準点は、3 と 4 の中間に位置している。このことは、低依存・低服従群が、他の群よりも支配的傾向が強いことを示している。

Table 9 成人期前期・YG 検査 (S (社会的内向 - 外向) 因子) (最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	24	11.29	5.03				**
高依存・低服従群 (2)	15	11.60	4.61				+
低依存・高服従群 (3)	9	9.67	6.10				***
低依存・低服従群 (4)	29	14.34	3.49	**	+	***	

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

成人期前期群の YG 検査 S (社会的内向 - 外向) 因子 (Table 9) では、「高依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」 (5%水準)、「低依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」 (0.5%水準) の有意差と「高依存・低服従群」 < 「低依存・低服従群」 の有意傾向がみられた。低依存・低服従群以外の3群が示している平均値の標準点は3に位置し、低依存・低服従群の平均値が示す標準点は4に位置している。このことは、低依存・低服従群が他の群よりも、社会的外向性が強いことを示している。

次に、発達により、内的準拠枠をどのように変化させていくか(あるいは、変化させないか)を検討するため、親との心理的な距離が同一の群ごと青年期後期群・成人期前期群間で YG 検査 12 の下位因子平均値の有意差検定 (t 検定) を行った。有意差がみられた因子だけを Table 10 ~ 13 に示す。

Table 10 同一群での比較 高依存・高服従群

○ 因子

客観的 - 主観的	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	20	10.30	3.36	42	2.53	**
成人期前期群	24	7.63	3.60			

+... p<.10 **... p<.05 ***... p<.01 ****... p<.005

平均値が示す YG 検査プロフィール上の標準点は、両群とも3である。高依存・高服従群では、推計学的には、発達的に客観的になっていくことが示されたが、YG 検査の判定上では、大きな差異はないものと考えられる。

Table 11 同一群での比較 高依存・低服従群

A 因子

服従的 - 支配的	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	15	10.39	4.39	31	1.73	+
成人期前期群	18	7.87	3.89			

+... p<.10 **... p<.05 ***... p<.01 ****... p<.005

高依存・低服従群では、推計学上、発達的に支配性が弱まること(服従傾向が強まること)を示したが、前述の○因子 (Table 10) と同様、プロフィール上の標準点は、ともに3に位置している。このため、YG 検査の判定上では、大きな差異はないのかもしれないが、もともと「低服従」ではあるが、発達的に、親に服従する傾向が多少強まっていくことを示す結果かもしれない。

Table 12 同一群での比較 低依存・高服従群

(1) C 因子

気分の変化	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	18	12.33	4.21	25	2.16	**
成人期前期群	9	8.22	5.51			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

有意差はみられているが、平均値が示す標準点はともに3に位置している。発達的に、徐々に気分の変化は小さくなっていくと考えられるが、YG 検査判定上では、大きな差異はないものと考えられる。

(2) O 因子

客観的 - 主観的	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	18	11.72	4.50	25	2.80	**
成人期前期群	9	6.89	3.62			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

O 因子は、高依存・高服従群でも、「青年期後期群」>「成人期前期群」という有意差がみられている。しかし、高依存・高服従群では、YG 検査標準点は、両群とも3であり、低依存・高服従群では、青年期後期群が示す平均値の標準点が4、成人期前期群が示す平均値の標準点は3である。高依存・高服従群よりも大きく変化していることを示している。主観的な傾向が、徐々に収まっていくことを示している。

(3) Co 因子

協調的 - 非協調的	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	18	9.33	4.87	25	1.77	+
成人期前期群	9	6.00	3.97			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

青年期後期群が示す平均値の標準点は4であり、成人期前期群が示す平均値の標準点は3である。非協調的な傾向がなくなっていくことを示している。

(4) T 因子

思考的内向 - 外向	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	18	8.33	3.82	25	2.18	**
成人期前期群	9	12.11	5.04			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

青年期後期群が示す平均値の標準点は3であり、成人期前期群が示す平均値の標準点は4である。発達的に、思考的外向の傾向が強まることを示している。

低依存・高服従群では、発達的に、気分の変化は減少し、客観的傾向、協調的な傾向、思考的外向の傾向が強まることを示した。

Table 13 同一群での比較 低依存・低服従群

(1) D 因子

抑うつ性	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	27	10.22	5.73	54	2.54	**
成人期前期群	29	6.17	6.16			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

青年期後期群が示す平均値の標準点は3であり、成人期前期群が示す平均値の標準点は2である。発達的に、抑うつ傾向は減少することを示している。

(2) I 因子

劣等感	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	27	8.93	5.75	42.30	2.32	**
成人期前期群	29	5.79	4.19			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

青年期後期群が示す平均値の標準点は3であり、成人期前期群が示す平均値の標準点は2と3の境界線上である。発達的に、劣等感は小さくなる傾向があることを示している。

(3) N 因子

神経質傾向は

神経質	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	27	8.81	5.88	48.93	1.85	+
成人期前期群	29	6.21	4.55			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

青年期後期群が示す平均値の標準点は3であり、成人期前期群が示す平均値の標準点は2である。神経質傾向は、減少していくことを示している。

(4) O 因子

客観的 - 主観的	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	27	8.78	4.33	54	1.88	+
成人期前期群	29	6.59	4.39			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

高依存・高服従群と低依存・高服従群でもO因子は、「青年期後期群」>「成人期前期群」という有意差がみられたが、YG検査標準点が、高依存・高服従群では、両群とも3で、低依存・高服従群は、青年期後期群が3で、成人期前期群が4であった。低依存・低服従群では、高依存・高服従群同様、両群とも3である。推計学的には、発達的に客観的な傾向にシフトしていくことを示しているが、YG検査の判定上では、高依存・高服従群と同様、大きな差異はなく、高依存・高服従群と同程度の変化であり、低依存・高服従群よりも大きな変化を示しているわけではないことを示している。

(5) Co 因子

協調的 - 非協調的	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	27	7.96	3.85	54	3.07	****
成人期前期群	29	5.00	3.38			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

Co 因子は、低依存・高服従群でも、「青年期後期群」>「成人期前期群」という有意差がみられた。低依存・高服従群の YG 検査標準点は、青年期後期群が4であり、成人期前期群が3であった。低依存・低服従群での青年期後期群が示す平均値の標準点は3であり、成人期前期群が示す平均値の標準点も3である。推計学的には、O因子と同様、発達的に協調的な傾向にシフトしていくことを示しているが、YG検査の判定上では、大きな差異はないことを示している。

(6) T 因子

思考的内向 - 外向	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	27	9.70	4.47	54	1.73	+
成人期前期群	29	11.76	4.41			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

青年期後期群が示す平均値の標準点は3であり、成人期前期群が示す平均値の標準点は4である。この因子も低依存・高服従群で、「青年期後期群」<「成人期前期群」という低依存・低服従群と同様の有意差がみられている。低依存・高服従群の YG 検査プロフィール上の標準点は、青年期後期群が3で、成人期前期群が4というように、低依存・低服従群と同様である。発達的に、思考的外向の傾向が強まることを示している。

(7) S 因子

社会的内向 - 外向	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	26	12.19	4.10	53	2.10	**
成人期前期群	29	14.34	3.49			

+...p<.10 **...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005

S 因子は、低依存・低服従群だけで有意差がみられた。YG 検査が示す標準点は、青年期後期群が 3 , 成人期前期群が 4 である。発達的に、社交性などが高まっていくことを示している。

低依存・低服従群では、YG 検査で測定される 12 の下位因子のうち、7 因子に発達の差異が見られた。YG 検査プロフィール上の標準点の移動も 7 因子中 5 因子あった。抑うつ性は減少し、劣等感、神経症傾向は縮小し、客観的、協調的傾向が強まり、思考的にも社会的にも外向傾向が強まったことが示された。

本研究で調査している 4 群の中で、最も変化している群である。

・考察

(1) 発達段階別の 4 群比較

発達段階別の 4 群比較 (Table 2 , 3) では、青年期後期群は、YG 検査 12 の下位因子中、4 群間で有意差がみられた下位因子は、N (神経質) 因子の 1 因子だけに対して、成人期前期群では、5 因子あった。このことは、青年期後期段階では、親との心理的な距離が異なっても、内的準拠枠となる性格特性に大きな差異はないことを示し、成人期前期段階では、親との心理的な距離によって、内的準拠枠がかなり異なってくることを示している。

青年期後期段階では、親との心理的な距離に関係なく、親の影響下にあり、親の判断・意向が青年の判断・意向に影響を与えていると推測される。それは、親との同居や経済的な支援を受けるなど、親の意向も考慮しつつ、青年は判断していることが考えられるためである。青年期まで、親の影響が強いという指摘もある (小高、1998)。あるいは、親との心理的な距離に関係なく、親に実質的な依存をしていることや、親の支援は当然だ、といった生得的な感覚がすべての群にあり、親に対する心理的な依存・服従が内的準拠枠に影響しないのではないだろうか。

これに対して、成人期前期段階になると、後述する低依存・低服従群のように、自他分離がなされ、親から心理的に自立すると、依存は生得的なことではなくなる。当然のことであるが、親の意向・判断とは別次元で、自ら判断することが多くなる。そのため、青年期後期段階とは異なった内的準拠枠を作っていく必要性に迫られる。すなわち、「自己の再構成」が必要になってくるのではないだろうか。しかし、高依存・高服従群のように親と心理的に近いと、自他分離は起こらず、親と同一化した状態で青年期から成人期に連続的に移行するためか、大幅に内的準拠枠を変更する必要がない (「自己の再構成」の必要がない) と考えられる。このように、青年期から成人期への移行期に (あるいは、移行後に)、親との心理的な距離が影響し、内的準拠枠となる性格特性に差異が出てくるのではないだろうか。

以下、より詳細に検討するため、有意差がみられた YG 検査下位因子ごとみていきたい。

(2) 4群比較で有意差がみられた YG 検査下位因子

青年期後期群

青年期後期群では、N (神経質) 因子だけに差異がみられた。有意差がみられたのは、「高依存・高服従群」>「高依存・低服従群」(1%水準)、「高依存・高服従群」>「低依存・低服従群」(5%水準)で、そして、「低依存・高服従群」>「高依存・低服従群」という有意傾向も見られている (Table 4)。

高依存・高服従群が最も平均値が高く、高依存・低服従群と低依存・低服従群との間に有意差がみられる。このことは、N (神経質) 因子が、神経質傾向だけでなく心配性を意味する因子でもあることから、高依存・高服従群は、親へ依存・服従することで、自ら決断することを回避し、親の考えを準拠枠 (外的準拠枠) にしている、と考えられる。しかし、4群の平均値は、YG 検査プロフィール上での標準点3に位置しており、4群間に大きな差異はないものと考えられる。すなわち、前述のように、青年期後期段階では、親との心理的な距離の違いは、内的準拠枠にほとんど影響を与えないものと考えられる。

ただ、同じ「高依存」である高依存・低服従群は、有意差はないが、また、標準点も同一だが、低依存・低服従群よりもN (神経質) 因子得点平均値は低い。高依存・高服従群とは、有意差がみられる。4群の中で、最も神経質ではないことを示している。同じ「高依存」でも、何か「依存」の質的な側面が異なっていることを示していると推測される。

成人期前期群

成人期前期群では、5つの YG 検査下位因子で4群間に有意差がみられた (Table 3)。青年期後期群と比べ、親との心理的な距離が、内的準拠枠 (性格) の内容に大きく影響を与えていることを示している。総じて、低依存・低服従群が、他の群と比べ、情緒的に安定し、積極的な内的準拠枠を形成したことを示している。

SE (Self-Esteem) の観点から検討した前研究 (三田、2008b) においても、青年期後期段階では、SE 得点は4群間で差異がなかったところから、成人期前期段階では、低依存・低服従群だけが、青年期後期段階から有意に得点を上昇させ、成人期前期段階の他の3群と比較した場合でも有意に高い得点を示している。本研究で取り上げた性格特性 (内的準拠枠) においても、青年期後期段階では、4群とも性格特性に、大きな差異がないところから、低依存・低服従群は、成人社会にデビューしていく中で (あるいは、成人社会にデビュー後に)、内的準拠枠を大幅に変更していくことを示している。以下、有意差がみられている YG 検査下位因子ごとに検討していく。

a. I (劣等感) 因子

「高依存・高服従群」>「低依存・低服従群」(0.5%水準)、「高依存・低服従群」>「低依存・低服従群」(5%水準)という有意差を示した (Table 5)。

成人期前期群では、親への依存が、劣等感の原因となることを示している。青年期後期段階では、このような傾向は見られなかった。親に依存していることは、青年期後期段階までは、前述のように、生得的なことで、社会通念上も許容されている、と見なされている社会的な雰囲気があるためか、心理的に親に依存・服従している群 (高依存・高服従群) でも、していない群 (低依存・低服従群) でも、親への依存が劣等感の原因とはならない

と考えられる。しかし、社会通念上、当然、全般的に親から自立していると見なされる発達段階（成人期前期群）で、親への心理的な依存をすることは、社会通念上許容されないと認識され、劣等感を抱く原因となることを示した結果と推測される。

親から心理的に自立したいが、何かしらの理由で現実的に心理的自立を果たしていないというジレンマ、あるいは、葛藤状態があるものと推測される。

b . N（神経質）因子

「高依存・高服従群」>「低依存・低服従群」（0.5%水準）、「高依存・低服従群」>「低依存・低服従群」（5%水準）、「低依存・高服従群」>「低依存・低服従群」（10%水準）という有意差と有意傾向を示した（Table 6）。N（神経質）因子は、青年期後期段階でも4群間に有意差がみられている（Table 4）。

しかし、青年期後期段階では、高依存・低服従群が最も低いN（神経質）因子得点を示した（神経質ではない）のに対し、成人期前期段階では、低依存・低服従群が最も低い得点を示している。青年期後期群ではみられなかった、高依存・低服従群との間にも有意差（「高依存・低服従群」>「低依存・低服従群」）がみられた。

YG 検査プロフィール上での標準点は、青年期後期群では、4群とも3に位置していたが、成人期前期群では、低依存・低服従群だけが2に位置し、他の3群は3に位置している。このことから、低依存・低服従群以外の3群が、神経質傾向が高いことを示しているわけではなく、親から心理的に距離を持つことで、心理的に、より安定していくことを示していると考えられる。

前述のI（劣等感）因子での、親に対する心理的な依存心が劣等感を強める、という結果に対応した結果と考えられる。

c . Co（協調性 - 非協調性）因子

「高依存・高服従群」>「高依存・低服従群」（5%水準）、「高依存・高服従群」>「低依存・低服従群」（1%水準）という有意差を示した（Table 7）。「低服従」である方が、協調性は高いことを示した。これは、「協調的」な態度とは、依存することではない、ということを示唆する結果との考えられる。「服従」しないこと、すなわち、対等な関係にあることが「協調的」な態度である、と示唆しているのではないだろうか。

同様に、親からの心理的な距離が最も離れている群であり、心理的な自立度が高い群と考えられる低依存・低服従群は、標準点が3であるため、「協調性に富んでいる」とまで指摘できないが、非協調的でもない。心理的な自立度の高さは、親から心理的に分離してしまうことではなく、ある程度の協調性を維持していることを示す結果と考えられる。他者から分離・独立を目指す自己形成ではなく、他者との関係を重視した自己形成を示唆するものと考えられる。

しかし、自己中心的な性格傾向が高い群と考えられる高依存・低服従群が、高依存・高服従群と比べたときに、推計学的には、協調性が高い結果が得られたことは、意外な印象を受ける。この件については、後述する。

いずれにしても、YG 検査のプロフィール上での標準点は、4群とも3に位置した。YG 検査の判定上では、大きな差異はないと考えられる。

d . A (服従的 - 支配的) 因子

「高依存・低服従群」 < 「低依存・低服従群」(1%水準)、「低依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」(5%水準)の有意差と「高依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」の有意傾向を示した (Table 8)。YG 検査プロフィール上の標準点は、低依存・低服従群が3と4の中間に位置し、他の3群は3に位置している。

低依存・低服従群が最も高い支配性を示した。YG 検査 A (服従的 - 支配的) 因子は、社会的指導性やリーダーシップを意味している。心理的に親から自立した状態で成人社会へと適応していくときに、リーダーシップのような積極性が必要になってくるため、と考えられる。

高依存・低服従群と低依存・高服従群の間に有意差がみられず、プロフィール上の標準点もこの2群とも3に位置している。この2群は、「服従的 - 支配的」という性格特性に大きな差異はなく、2群とも中庸と考えるべきである。しかし、有意差がみられ、標準点も異なる低依存・低服従群と比べたとき、低依存・高服従群は、元々「高服従」であるため、親に対する服従傾向が強いと考えられ、YG 検査でも服従傾向が強くなることは、理解しやすいが、高依存・低服従群が、低依存・高服従群と同様の平均値を示すことが、理解しにくい。「依存」の質が、各群によって異なるのではないかと推測したように、ここでは、「服従」の質の違いが考えられる。

本研究は、「依存」や「服従」の質的な側面まで調査していないため、本研究で得られたデータからだけでは、明確なことは指摘できないが、低依存・高服従群は、言葉の意味通りに「服従」傾向があるのかもしれない。例えば、親の高圧的な態度から、親に対する愛着はないが、仕方なしに、指示には従っている、というような場合が想定される。あるいは、成人期に達し、親との親和性を維持するために「服従」しているのかもしれない。しかし、高依存・低服従群は、表面的にだけ指示に従うように振る舞っているだけで、実際には、指示に従っていないことが推測される。

e . S (社会的内向 - 外向) 因子

「高依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」(5%水準)、「低依存・高服従群」 < 「低依存・低服従群」(1%水準)の有意差と、「高依存・低服従群」 < 「低依存・低服従群」の有意傾向を示した (Table 9)。YG 検査プロフィール上の標準点は、低依存・低服従群だけが4に位置し、他の3群は3に位置している。

YG 検査 A (服従的 - 支配的) 因子の結果 (Table 8) と同様、親に心理的な依存も服従もしない状態で、成人社会に適応していくとき、外向性のような積極性が必要になっていると考えられる。

(3) 青年期後期群・成人期前期群の同一群での比較

発達していく中で内的準拠枠がどのように変化していくかを検討するため、青年期後期群と成人期前期群での同一群ごと、YG 検査下位因子得点平均値の有意差検定 (t 検定) を行った。以下、各群ごと検討していく。

高依存・高服従群

高依存・高服従群 (Table10) では、O (客観的 - 主観的) 因子の1因子だけが平均値を有意に低下させた。すなわち、発達的に、より客観的な傾向を強めたことを示したが、プロフィール上の標準点は、ともに3に位置している。大きく変化したものではないと考えられる。成人期前期段階になると青年期後期段階よりは、多少は、親との関係を客観的にみるように変化していると考えられるが、発達段階によって、内的準拠枠を大きく変更する必要がない群と考えられる。親との同一化から、親が「外的準拠枠」として機能するためか、自らの内的準拠枠を変化させる必要に迫られないのではないだろうか。

高依存・低服従群

高依存・低服従群 (Table11) でも、有意差がみられた YG 検査下位因子は1因子のみで、A (服従的 - 支配的) 因子の平均値が有意に低下し、発達的に、より服従的な傾向を強める結果を得た。発達とともに、多少は、親に従う姿勢が強まる傾向を示している。しかし、これも高依存・高服従群と同様で、プロフィール上の標準点は、ともに3に位置しているため、大幅に変化したと指摘できるものではないと考える。この群も、高依存・高服従群と同様、発達段階によって、内的準拠枠を変更する必要がない群と考えられる。

低依存・高服従群

低依存・高服従群 (table12) では、YG 検査の下位因子 12 因子中 4 因子に有意差がみられた。YG 検査のプロフィール上も、C (気分の変化) 因子以外は、標準点を移動させている。発達的に、気分の変化が小さくなり (C 因子)、より客観的になり (O 因子)、協調的傾向を強め (Co 因子)、考え方がより外向的になる (T 因子)、という結果を得た。

この群は、発達的に、情緒的な安定感を示す因子の得点を上昇させた。親を高圧的に感じ、親に愛着はないが、仕方なく親の指示に従っている、と考えるよりは、やはり、この群の親への「服従」は、前述のような受動的に親に「服従」するのではなく、親との親和性を維持するために、能動的に「服従」していると考えた方が妥当なものと思われる。親との親和性を維持しながら、成人社会に適応していくときでも、後述する低依存・低服従群と類似する内的準拠枠を形成してと考えられる。他者との関係を重視した自己形成をしている群と考えられる。

低依存・低服従群

低依存・低服従群 (Table13) では、YG 検査の 12 下位因子中 7 因子に有意差がみられた (Table13)。プロフィール上でも、7 因子中 5 因子 (D 因子、I 因子、N 因子、T 因子、S 因子) に標準点の移動がみられた。発達的に、YG 検査の類型判定での D 型 (積極・安定型) に近づいていく傾向を示した。

この群は、青年期後期段階までは、他の3群と同様の内的準拠枠を維持していても、成人社会にデビューしていくとき (デビューした後)、一気に内的準拠枠を大幅に変更していく。SE で検討 (三田、2008b) したときにも、同じように、成人社会にデビューしていくときに (デビューした後)、一気に SE を上昇させたように、内的準拠枠も一気に変更していつている。親から心理的に分離・独立した状態で、成人期に移行していくときに

は、かなり大幅に内的準拠枠を変更していく必要があることを示した結果と考える。

(4) 総括的討論

青年期後期段階では、親との心理的な距離による YG 検査下位因子の得点上の差異は、N (神経質) 因子だけ (Table 2) であったが、この差異も、YG 検査判定上では、大きな差異ではなく、親との心理的な距離は、内的準拠枠に強く影響しないことを示した。

成人期前期段階では、YG 検査の 12 下位因子中、5 つの下位因子で有意差がみられている (Table 3)。成人期前期段階になると、親との心理的な距離は、内的準拠枠に強く影響していることを本研究は示した。

高依存・高服従群と高依存・低服従群は、青年期後期段階から成人期前期段階にかけて、内的準拠枠を大きく変化させていない。これに対し、低依存・高服従群と低依存・低服従群は、成人社会にデビューするために (あるいは、デビューした後に)、内的準拠枠を大きく変化させていったことを示した。

高依存・高服従群と高依存・低服従群は、青年期から成人期にかけて連続的に移行し、低依存・高服従群と低依存・低服従群は、青年期までのことをいったん撤回し、成人としての内的準拠枠を再構成、あるいは、改めて形成し直しているかのような印象を受ける。

加藤 (1987) が示した発達過程 (「自己の再構成」から「自己と社会との統合」) に、低依存・高服従群と低依存・低服従群は、概ね一致するプロセスを経ていると考えられる。

しかし、本研究では、青年期後期段階までは、4 群とも類似した内的準拠枠を構成していた。「自己の再構成」を行った低依存・高服従群と低依存・低服従群は、青年期中期段階で「自己の再構成」を行い、青年期後期段階で「自己と社会との統合」をしていくのではなく、青年期後期段階から成人期前期段階に至る間に (あるいは、成人期に移行してから)、一気に「自己の再構成」と「自己と社会との統合」を行ったと考えられる。発達段階と発達過程のズレは、親子関係の質が時代により異なっていることが影響しているのかもしれない。

以前議論 (三田、2008a) したように、Kohut, H. (1971) が示した「自己対象」が青年期まで継続している、という仮定にもとづけば、「青年期段階まで親が「自己対象」的に存在しているのであれば、まだ成熟していない青年の心理構造を包み込むために親が青年に代わって対処行動を考えることは推測される。あるいは、青年自身がそれを必要としているのかもしれない。」(p.11)。親がいわゆる「代理自我」的に青年期終了まで存在していれば、青年の自己改革は遅延する可能性は考えられる。親子関係が、「自己 - 対象」関係の時代と「自己 - 自己対象」関係の時代では、発達のプロセスは同様でも、各発達段階での「テーマ」には、「ズレ」が生じてくると考えられる。現代社会の親子関係は、青年期終了まで「自己 - 自己対象」関係となっていて、成人期への移行期 (あるいは、移行後) に、「自己 - 対象」関係へと変化していくのではないかと推測している。あるいは、青年期が延長・拡大した結果、本研究で「成人期前期」とした発達段階が、「青年期後期」の発達段階に相当しているのであれば、加藤 (1987) が示した青年期の 3 区分に一致してくるとも考えられる。

いずれにしても、青年期後期段階から成人期前期段階にかけて、内的準拠枠を変化させ

るか否か（「自己改革」を行うか否か、「自己の再構成」を行うか否か）の軸が、親に対する心理的な依存心の高・低にあることを本研究は示している。しかも、成人期に移行してからではなく、青年期後期段階での親との心理的な距離によって、成人期前期段階での内的準拠枠の内容が異なることを示した。

「自己の再構成」を行うか否かの軸が「依存」にあるが、「服従」の高・低も各群の内的準拠枠に影響を与えている。

高依存・高服従群は、劣等感が強いこと（Table 5）が特徴的であり、高依存・低服従群と比較した場合、若干非協調的な傾向がある（Table 7、有意差はみられるものの、標準点はともに3に位置しているが・・・）が、発達的には、若干、客観的になる（Table 10、有意差はみられるものの、標準点はともに3に位置しているが・・・）傾向を示している。

これに対し、高依存・低服従群も、劣等感は強く（Table 5）、高依存・高服従群と比較した場合、若干、協調的な傾向があり（Table 7、有意差はみられるものの、標準点はともに3に位置しているが・・・）、発達的には、若干、服従傾向が強まる（Table 11、有意差はみられるものの、標準点はともに3に位置しているが・・・）傾向を示している。

高依存・高服従群は、親との心理的な距離を広げ（非協調的で客観的になる。冷静になって、親と向き合えるようになるとも推測できる）、高依存・低服従群は、親との心理的な距離を縮める（協調的になり、服従傾向が多少強まる。親に対して、多少素直になってきているとも推測できる）、という変化を示している。この2群の親との心理的な距離が、成人期に移行する中（移行後に）、逆方向にシフトしている。

一方、青年期から成人期への移行に伴い、内的準拠枠を「再構成」した低依存・高服従群と低依存・低服従群は、青年期後期群と成人期前期群との間に差異がみられた YG 検査下位因子は、類似している。

青年期後期群と成人期前期群との間に有意差がみられ YG 検査下位因子は、低依存・高服従群が4因子（Table 12）で、低依存・低服従群は7因子（Table 13）であった。このうち、3因子（O（客観的 - 主観的）因子、Co（協調的 - 非協調的）因子、T（思考的内向 - 外向）因子）が共通している。

より多くの下位因子に有意差がみられた低依存・低服従群は、前研究（三田、2008b）で、SE が唯一上昇した群である。SE をエネルギー源として、内的準拠枠を一気に「再構成」していったと考えられる。しかし、低依存・高服従群は SE が上昇していない。青年期後期段階まで、他の群と類似した内的準拠枠を形成していても、もともと「低依存」である。青年期終了まで、意識の上では「低依存」であっても、生得的に（無意識的に）親への心理的な依存を実質的にしていたことが推測される。成人期への移行期や移行後にこれまで（青年期まで）、生得的に親へ心理的な依存をしていたことに気づき、自他分離（親子関係が「自己 - 自己対象」関係から「自己 - 対象」関係へと移行した）がなされ、本来の意味で、親から心理的に分離・独立したい、しなければならない、という動機付けが図られ、それが、エネルギー源となったのであろうか。しかし、「高服従」である。親との親和性は維持したい、と考えるため、低依存・低服従群のように内的準拠枠を全面的に作り替えたり、親から心理的に完全な分離・独立をすることまではしないのではないかと考えられる。あるいは、成人期に移行していく中（あるいは、移行後に）、内的準拠枠を「再構成」しなければならない状況があり、必要最小限の「再構成」を行った結果である

うか。このように考えると、青年期から成人期へと移行する場合の必要最低限の自己改革は、客観的に事象を眺める能力（O（客観的 - 主観的）因子）、他者と協調性を養うこと（Co（協調的 - 非協調的）因子）、深く物事を考えるよりは、多少、（客観的ではあるが・・・）大雑把に事象をとらえる能力（T（思考的内向 - 外向）因子）、などを高めるということになる。

この件については、別の機会に譲るとして、岡本（1997）は、成人期のアイデンティティをとらえる軸として、「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」の2つの軸があり、両者は、相互に影響し合いながらアイデンティティを発達させていくことを指摘している。そして、「個としてのアイデンティティ」を前提として「関係性にもとづくアイデンティティ」へと拡大させていくタイプと、「関係性にもとづくアイデンティティ」を前提として「個としてのアイデンティティ」に拡大させていくタイプという2つの類型を指摘している。

「個としてのアイデンティティ」形成とは、「自分とは何者であるか」「自分は何になっていくのか」が中心テーマであり、「関係性にもとづくアイデンティティ」形成とは、「自分は誰のために存在するのか」「自分は誰の役に立つのか」が中心テーマとなると述べている（Pp.49 ~ 50）。なお、「関係性」については、「親子関係」だけでなく、「家族関係」、「友人関係」など多様にあることも指摘している。

本研究のデータからは、関係性の重視度はわからないため、多少乱暴な推論となるが、親に対する心理的な依存は、「関係性」を重視しているか否かは別としても、親との心理的な関係を維持していることになる。単純に考えれば、高依存・高服従群と高依存・低服従群は、「関係性にもとづくアイデンティティ」形成を前提とし、低依存・高服従群と低依存・低服従群は、「個としてのアイデンティティ」形成を前提としていると考えることができる。このように考えると、「個としてのアイデンティティ」を前提とした発達、「関係性にもとづくアイデンティティ」を前提とした発達も、成人期への移行期や移行後に決まるのではなく、青年期での親との心理的な距離の取り方で、いずれを目指すかが決まってくると考えられる。

しかし、高依存・高服従群と高依存・低服従群が「関係性にもとづくアイデンティティ」を目指し、低依存・高服従群と低依存・低服従群が「個としてのアイデンティティ」を目指している、と考えることには違和感がある。

もともと女性の自己形成は、「他者からの分化」ではなく「他者との関係性」にもとづく自己形成であるという指摘（杉村、1998）がある。高依存・高服従群は、高依存・低服従群と低依存・低服従群と比較した場合、Co（協調性 - 非協調性）因子得点は、推計学的には有意に高い（YG 検査判定上は標準点は3と同一であるが・・・）。高依存・高服従群の方が非協調的で、高依存・低服従群と低依存・低服従群の方が協調的傾向を強めている（Table 7）。また、Co（協調的 - 非協調的）因子に関して、低依存・低服従群は、発達段階を移行させたときに、標準点は3と変化しなかったが、推計学的には、有意に平均値を低下させ協調的な傾向を強めている（Table 13 - (5)）。低依存・高服従群では、Co（協調性 - 非協調性）因子の平均値を有意に低下させただけでなく、標準点も4から3へとシフトさせ、ともに協調性を高めている。「他者との関係性」にもつづく自己形成に通じている結果と考えられる。

特に、低依存・高服従群は、親の高圧的な態度から、愛着は感じないが、仕方なしに指示に従っている、と考えるよりは、親との親和性を維持していくために、自然なかたちで親の指示に従っている、という印象が強い。「関係性にもとづくアイデンティティ」形成を目指しているのは、この群とも推測される。

これに対し、女性の自己形成の特徴とされる「他者との関係性」を持ちながら「個としてのアイデンティティ」を目指すタイプは、低依存・低服従群ではないだろうか。

高依存・高服従群と高依存・低服従群は、成人期に移行する中で（移行後に）、前述のように、一方は（高依存・高服従群）親との心理的な距離を広げ、一方は（高依存・低服従群）縮める、といったように、親との適正な心理的な距離を探っているかのような印象を受ける。ともに劣等感が強いことから、親への心理的な依存は、社会通念上許容されないと気づいた結果かもしれない。そして、親子関係が「自己-自己対象」関係から「自己-対象」関係へと移行していることを示す結果かもしれない。

いずれにしても、本研究は、アイデンティティ形成を中心課題としたものではないが、親に対する心理的な依存・服従は、「個としてのアイデンティティ」・「関係性にもとづくアイデンティティ」と強く関連している。女性の自己形成過程を検討する上で重要な示唆を与えてくれるものと考えられる。

高依存・高服従群と高依存・低服従群の2群についての大きな違いは、本研究のデータからは読み取れないが、高依存・高服従群と高依存・低服従群だけでなく、他の2群も含め、それぞれの群における、親に対する心理的な「依存」や「服従」には、質的な差異があるように思われる。このことについては、今後の課題としていきたいと考える。

本研究で明らかになったことは、青年期後期段階まで、親との心理的な距離に関係なく、内的準拠性は、各群類似したものになっているが、青年期後期段階での親との心理的な距離の違いによって、成人期前期段階での内的準拠性に大きな差異が生じてくること、そして、成人期への移行期に（移行後に）、内的準拠性を変化させるか否かの軸が、親に対する心理的な依存心の高・低にある、ということであった。

ただし、男性との比較を行っていないため、このことが女性の自己形成の特徴だとは、明確に指摘はできない。また、個人の発達過程を考えた場合、青年期後期段階で高依存・高服従群であっても、成人期前期段階になると低依存・低服従群に移行している場合も十分想定できる。しかし、本研究は、横断的研究である。横断的に検討した場合、親との心理的な距離によって、成人期前期段階で、内的準拠性に大きな差異が生じることを改めて指摘しておきたいと思う。

< 引用・参考文献 >

- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- ・小高恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究, 教育心理学研究, 46, 333-342.
- ・Kohut,H. 1971 The analysis of self. 水野信義・笠原嘉(監訳) 1994 自己の分析 みすず書房

- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達，青年心理学研究，15，1-15．
- ・三田英二 2008a 自己規定要因からみた女性の独立意識 - 発達の観点から，青年期後期と成人期前期の比較 -、静岡県立大学短期大学部研究紀要，21-W-6，1-16．
- ・三田英二 2008b 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と Self-Esteem の関係，静岡県立大学短期大学部研究紀要，21，37-48．号
- ・岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- ・杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し，発達心理学研究，9，45-55．
- ・辻岡美延 2000 新性格検査法 - YG 性格検査 応用・研究手引き - 日本心理テスト研究所株式会社

付録 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）

（三田，2003 を一部改変）

		共通性
6．人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。	.740 -.014 -.031 .036 -.056	.553
8．まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712 .046 .016 .294 -.109	.608
5．生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699 .008 -.257 -.077 .038	.562
36．どうしたらよいのか、自分で決心できないことが多い。	-.661 .139 .276 .278 .275	.686
4．自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625 -.125 .026 -.135 -.059	.429
35．他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	-.585 .049 .043 .203 .237	.443
7．生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583 .227 -.345 .115 .108	.535
10．自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570 .190 .222 -.111 .262	.491
9．小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519 .026 .186 .120 .216	.366
22．つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	-.035 .831 .051 .002 .059	.698
20．親といるだけで何となく安心できる。	-.060 .795 .148 -.067 .021	.662
24．親は自分の心の支えである。	.014 .786 .014 .030 .018	.620
23．できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014 .783 .026 -.056 .057	.620
21．困った時は親に頼りたくなる。	-.141 .714 .149 .010 -.025	.553
25．何かする時には、親にはげましてもらいたい。	-.049 .653 -.078 .260 .312	.600
33．両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。	-.143 -.645 .048 .259 .160	.531
27．親には何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073 .543 -.086 .256 .382	.519

14. 将来、どんな職業についたらよいかわからない。	.015	.062	.857	.028	.126	.755
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	.758	.150	-.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	-.687	-.023	-.159	.618
31. 両親について反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	.698	-.180	.560
30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる	-.010	-.030	.063	.691	-.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになる ことが多い。	.113	-.325	.110	.575	-.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.290	.113	-.047	.531	.066	.385
18. 親にさからえないで、言うとおりにになってしまいやすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じる ことはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができる と思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする（がまんした り、調節したりする）ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすること には強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひけめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和 寄与率(%)	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9	
	.850	.876	.809	.619	.680	

(2010 年 12 月 15 日 受理)